



Dr. Wolfgang Lehnert

# ドイツのエコ建築家 ヴォルフガング・レーナート博士と 筆者の対談「ブルーノ・タウトの志とSDGs」

お茶の水女子大学名誉教授・工博 田中 辰明

## はじめに

熱海ブルーノ・タウト連盟(矢崎英夫会長)主催で2023年4月11日熱海市の起雲閣<sup>註1)</sup>の音楽ホールにおいて「青雲の志」というタイトルでヴォルフガング・レーナート(Wolfgang Lehnert)博士とマンフレッド・シュバイデル(Manfred Speidel)教授による講演会が催された。この講演会は日本バウハウス協会(浅野忠利理事長)が共催した。シュバイデル教授の講演は同教授が最近出版した「ブルーノ・タウト:日本の工芸芸術と家具」<sup>註2)</sup>という本のタイトルと同じものであった。レーナート博士の講演は本誌2023年6月号で紹介した。この講演会の第二部ではレーナート博士と筆者の対談が行われた。この対談の概要を紹介する。(写真2)

## 対談「ブルーノ・タウトの志とSDGs」

田中:ブルーノ・タウトは「社会主義の建築家」、「世界的建築家」、「色彩の建築家」、「表現主義の建築家」、「宇宙の神秘に耳を傾けた建築家」、「日本美を再発見した建築家」などいろいろな形容詞句を伴って表現されております。一方で「環境に配慮した建築家」とも言われております。今でいう「SDGsに配慮した建築家」という事になるのでしょうか、この事についてお話いただけますか?  
レーナート:はい、1938年にイスタンブールで亡くなったブルーノ・タウトは、今日もお後世の人々に影響を与え続ける建築の遺産を残しました。ブルーノ・タウトの親族は、今日も彼の証人となっています。彼の生涯のパートナーであったエリカ・ヴィッティヒ<sup>註3)</sup>と、その娘でブルーノ・タウトを父に持つクラリッサ<sup>註4)</sup>などであります。

1906年、ブルーノ・タウトはテオドール・フィッシャーのもとで働きながら、コーリン<sup>註5)</sup>出身の妻ヘド



写真2 講演前に訪問したブルーノ・タウト設計で日本に唯一残る熱海日向別邸で談笑する Prof. Manfred Speidel (左)と Dr. Wolfgang Lehnert

ウィグ(旧姓ヴォルガスト)と結婚。1907年にシュトゥットガルトで生まれた息子ハインリッヒ<sup>註6)</sup>は、ウンターレキシンゲンの教会で洗礼を受けました。1908年、娘のエリザベートが生まれました。彼女の娘のクリスチーネ、すなわちブルーノ・タウトの孫は、弁護士で政治家のオットー・シリー<sup>註7)</sup>と結婚しました。この結婚により、1967年、女優のジェニー・ローザ・シリーが誕生しました。彼女はブルーノ・タウトの曾孫にあたります(写真3、写真4)。タウトは美人のヘドヴィックを妻に娶りました。オットー・シリーは弁舌爽やかな大政治家です。ジェニー・シリーは美人系統の血を引き、父親似で、弁舌爽やか、知的な美人俳優として活躍しています。

オットー・シリーは1980年にできた連邦政党「緑の党」の共同設立者であり、後にドイツ連邦議会議員になりました。しかし当時の緑の党は小さな政党でした。従って緑の党にとどまっていたは自分の環境に対する考えを国の政策とすることは困難と考えました。そして1989年に緑の党を離党し、ドイツ社会党(SPD)の一員となっております。1998年から2005年まで、ゲルハルト・シュレーダー政権下で内務大臣を務めました。そして環境に



写真3 ドイツで緑の党を立ち上げ、後社会党政権の時に国務大臣として環境政策をすすめたオットー・シリー(ブルーノ・タウトの孫クリスチーネさんと結婚)



写真4 オットー・シリーとクリスチーネさんの間の娘ジェニー・シリー(ドイツの有名女優、タウトの曾孫)

対する自分の考えを次々と法案にし、それを成立させました。ドイツ国民もこれを理解し、原発を停止するなど、ドイツは環境先進国と云われるようになりました。

## 政治家オットー・シリーとタウトの関係

田中：オットー・シリーとブルーノ・タウトはどのような関係にあったのでしょうか？

レーナート：オットー・シリーにとって、ブルーノ・タウトは20世紀初頭の印象的な人物の一人でありました。その理由は、ブルーノ・タウトが美意識と道徳的な願望、そしてビジョンと実践を結びつけようとしたからであります。具体的に申しますと、タウトが集合住宅を設計する前の労働者の住宅は全くひどいものでした。風通しは悪く、日照の事など配慮されていませんでした。住宅は常に湿っており、結核患者も多数出ました。ブルーノ・タウトはこれではいけないと考え、住棟間隔をあげて、風通しを良くし、住宅に太陽光線が入るように配慮しました。また緑を配置しました。

オットー・シリーは、ブルーノ・タウトと当時の若い建築家たちを、第一次世界大戦の経験によって形作られた世代と評しています。彼らは、戦争の巨大な産業破壊力を体験し、何百万人もの死者と苦しみを目の当たりにしました。この世代の建築家たちは、ドイツ帝国とヨーロッパが政治的に崩壊した事を経験しております。彼らは、第一次世界大戦の終結によってヨーロッパに変化をもたらした革命を良く知っていたのです。

オットー・シリーはタウト研究者ブレンネ氏の著書「ブルーノ・タウト」註8)に序文を書きました。そこで「ドイツが敗戦し、ドイツ帝国が崩壊した1918年のこうした経験にもかかわらず、もしこれらの戦争に使用する力を別の、より美しい道へと導くことができるのなら、地球

は本当に“良い住処”になるだろう」というブルーノ・タウトの楽観主義もここで示しております。

ブルーノ・タウトは、第1次世界大戦の恐怖と戦争がもたらした社会的影響を体験しました。彼の結論は、国民の力を戦争にではなく、地球を良い住処にするために使わなければならないというものでした。

今日、私共の住処である地球は再び大きな試練にさらされています。それは、地球温暖化現象がその一つであります。ロシアのウクライナ侵攻もそうです。ブルーノ・タウトの言葉通り、地球が本当に良い住処であり続けるために、今日、これらの力を異なる美しい軌道に導かなければなりません。

SDGsの11番で提案されている「住み続けられるまちづくりを」は、20世紀初頭のブルーノ・タウトの都市計画の中にすでに存在しています(写真5)。これには、適切で安全かつ手頃な価格の住宅、持続可能な居住計画、緑地へのアクセスの確保といった要求が含まれています。

今日の都市に対する追加的な要求は、以下の通りです：

都市はアイデアや商取引、文化、科学、生産、社会開発など、数多くの活動の拠点となります。都市の最もよい点は、人々の社会的、経済的な前進を可能にすることです。2030年までに、都市住民の数は50億人に増えると予測される中で、都市化がもたらす課題に対処するため、効率的な都市計画・管理実践の導入が重要となっています。雇用と豊かさを生み出しながら、土地や資源に負担をかけないように都市を維持する事が大切です。そのためには、多くの課題が存在します。共通に見られる都市問題としては、過密、基本的サービスを提供するための資金欠如、比較的安価で購入でき、健康的な住宅の不足、インフラの劣化、都市内部の大気汚染とその悪化などが挙げられます。都市内部の固形廃棄物の安全な除去と管理など、急速な都市化がもたらす課題は沢山あります。しかし都市の繁栄と成長を継続しながら、資源利用を改善し、汚染と貧困を削減できる方法で克服できます。その一例として、都市ごみ収集の増大が挙げられます。都市が基本的サービスやエネルギー、住宅、交通機関その他へのアクセスを確保し、すべての人に機会を提供できる未来をつくる必要があります。



写真5 SDGsの11番目「住み続けられるまちづくりを」

## タウトの持続可能な集落計画

田中：ブルーノ・タウトは社会主義の思想により、労働者の為に健康に配慮した集合住宅を沢山作りました。どのように作っていったのでしょうか？

レーナート：はい、19世紀末に末、ドイツでは労働者の為に住宅協同組合が誕生しました。19世紀末、ドイツでは法的に規制された住宅協同組合が誕生し、建築協同組合(Baugenossenschaft)、住宅協同組合(Wohnungsgenossenschaft)、住宅建設協同組合(Wohnbaugenossenschaft)、住宅団地協同組合(Siedlungsgenossenschaft)、住宅協会(Wohnungsverein)、建築協会(Bauverein)などの名称で存在するようになりました。これらの協同組合は、組合員に手頃な価格で健康的な住宅を提供することを目的としていました。

ブルーノ・タウトは、ベルリンやマクデブルクの住宅協同組合から、田園都市団地の計画・建設という大きな依頼を受けました。田園都市(ガーデンシティ)<sup>註9)</sup>は、20世紀初頭にイギリスからドイツにもたらされた新しい建築形態であります。ブルーノ・タウトは、これらの団地を北から南へ向かう街路で計画しました。こうする事で、日照と風通しを確保しました。

協同組合の原理と、都心部以外での低コストの建築という新しい発想により、労働者階級が安く、広い居住スペースで暮らすことが可能になりました。ベルリンのファルケンベルグ田園都市<sup>註10)</sup>の住戸床面積は、40～100平方メートルの広さでした。これはドイツ帝国時代の集合住宅とは異なり、浴室、便所が各住戸に完備されていました。100年経った今でも、これらの田園都市の集落は住民に親しまれており、ブルーノ・タウトの持続可能な集落計画が今日まで証明されているのです。また、ベルリンの住宅都市カール・レギエン<sup>註11)</sup>など、後から建設された住宅団地も、世界遺産に登録されたことでそのことが証明されております。環境に配慮した住宅団地という事であります(写真6、写真7)。

## タウトの出身地「ケーニヒスベルク」

田中：レーナート博士、ありがとうございます。時間も押しておりますので、ここで会場から質問をお受けしたいと存じます。質問される方は挙手をお願いいたします。

樫村弘子：日本バウハウス協会の理事をしております、



写真6 タウト設計の田園都市ファルケンベルク(Gartenstadt Falkenberg) 1913-1916, 2008年に世界文化遺産登録、Berlin, Grünau



写真7 タウト設計の住宅都市カール・レギエン(Wohnstadt Carl Legien, 1928-1930). 2008年に世界文化遺産登録

樫村です。ブルーノ・タウトはドイツのケーニヒスベルク出身と伺っておりますが、ドイツの地図を見ても、ケーニヒスベルクは見つかりません。どのような都市だったのでしょか？それとウンターレキシンゲンの教会についてお話しいただきましたが、タウトはニーデンの教会の改修もしたと伺っております。この教会についてもご説明ください。

レーナート：まずケーニヒスベルクについてお答え致します。

1946年以降、ケーニヒスベルク(Königsberg)という都市名では地図の上で見つけることが出来なくなりました。この都市はカリニングラード(Kaliningrad)に改名され、ロシアのカリニングラード州の州都になっています。

ドイツの歴史についてお話ししなければならないのですが、ケーニヒスベルクは1945年までドイツの東プロイセン州の州都で、約700年にわたる歴史を持っておりました。しかしこの歴史は第二次世界大戦の終結とも



写真8 カリーニングラード(ケーニヒスベルク)の位置、ロシアの飛び地である。

に途絶えました。第一次世界大戦が終わるまでは、ドイツ帝国の領土は東プロイセンにまで続いていました。第一次世界大戦でドイツが敗戦した結果、1918年のベルサイユ条約による領土変更により、東プロイセンは飛び地となってしまいました。ドイツ帝国から切り離されたことになったのです。このような状況は、第二次世界大戦が勃発するまで、ヨーロッパに大きな緊張をもたらしておりました(写真8)。

ケーニヒスベルクの町が出来るまでは、トワングステはこの地域の中プレゲル島の北にあったプロイセンの城の名前でした。1255年、ケーニヒスベルクは、サムランド半島の南東にあるプレイゲル川の河口に、チュートン騎士団<sup>註11)</sup>の城として誕生したのです。

クナイプホフ島は、1322年以來、市の教会区となっています。1330年から1380年にかけて、50年の歳月をかけてケーニヒスベルク大聖堂がここに建てられました。1525年、ホーエンツォレルン朝の支配の結果、プロテスタント教会への宗教改革が行われました。

1701年、プロイセンのフリードリヒ1世<sup>註12)</sup>はケーニヒスベルクで戴冠式を行い(写真9)、ケーニヒスベルクは王国となりました。その22年後、アルトシュタット、クナイプホフ、レーベニヒトの3つの町が統合され、ケーニヒスベルク市となりました。同じ1724年、ケーニヒ



写真9 1701年にフリードリヒ1世の戴冠式がケーニヒスベルクで行われた。

スベルクで最も有名な哲学者イマヌエル・カントが誕生しました。

ブルーノ・タウトは同郷のイマヌエル・カントの言葉、「星の輝ける大空は我が上に、道徳的規範は我が内に(Der bestirnte Himmel über mir, Das moralische Gesetz in mir)」という言葉に気に入っておりました。この言葉はタウトが通ったギムナジウム(高等学校)のそばにあったカントの墓に書かれていました。タウトは日本滞在中に短冊によくこの言葉を書き人に贈呈したそうです。その一つが高崎の少林山達磨寺<sup>註13)</sup>に残っております。



写真10 ケーニヒスベルク城

1800年頃のケーニヒスベルクの人口は約6万人でした。この都市は、ドイツで最も大きな都市の一つであったのです。何世紀にもわたって、ケーニヒスベルクはプロイセンの知的中心地でありました。と申しますのも長期にわたり、東プロイセンにはプロテスタントの騎士団が入植し、彼らは非常に知的で勤勉な人たちでした。ケーニヒスベルクの人たちはその子孫にあたり、やはり優秀な人が多かったのです。多数の学者を輩出しております。1871年以降、この地域はドイツ帝国に属し、経済的な後押しを受けることになりました。(写真10)

ケーニヒスベルクの中心部には、7つの橋が架かるブレゲル川が流れています。18世紀、このような状況から、ある数学的な問題が生まれました。それは、ブレゲル川にかかる7つの橋のすべてを一度だけ渡る方法はないかというものでした。すなわち、一筆書きの問題でした。多くの人がこの謎解きに挑戦しましたが、成功しませんでした。1736年、数学者レオンハルト・オイラーが、ケーニヒスベルクでは奇数の橋が4つの海岸(島)すべてに通じているため、一筆書きで全ての橋を渡ることは不可能であると証明しました(写真11)。

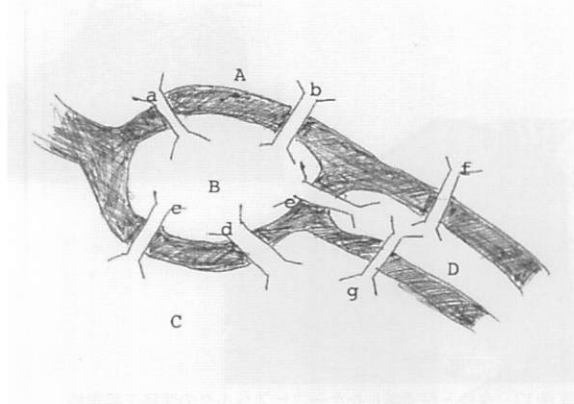


写真11 ケーニヒスベルクの7つの橋

## ケーニヒスベルク時代のタウト

ブルーノ・タウトは1880年5月4日、ケーニヒスベルクで生まれました。彼の家族は最初Sackheimer Hintergasseに住み、後にHabersberg地区のKronenstraße 11-12に引っ越しました。この地区は、工業プラント、軍用雑誌、アルテレリー馬小屋、主要駅付近の鉄道線路が特徴的な地域でありました。この地域のランドマークは、高さ77mの尖塔を持つハーバーベルク教会で、その頂上には大きな金の天使が飾られていました。

ブルーノ・タウトは、クナイフェフィッシェス・ギムナジウムを卒業した後、1897年にケーニヒスベルク建築工芸学校で学び始めました。同年、Baugewerbeschuleは、ミッテルトラグハイムの北部地区、シェーン通りにある写真のような新校舎に移転しました。建築家で歴史家のオイゲン・フォン・ツィハックの指導のもと、当時232名の生徒が登録されていました。タウトが学んだ学校は現在カーニングラードの建築貿易学校になり、管理棟として使用されています(写真12)。

ケーニヒスベルクで学んでいる間、ブルーノ・タウトは夏の間、当時としては近代的な鉄筋コンクリート構造物を建設する建設会社で石工の見習いをしました。冬の間は、建築貿易学校に通いました。この学校は、建築家とエンジニアの実践的な訓練に重点を置いた教育を行っていました。1901年、ブルーノ・タウトは、建築専門学校での4年間の勉強を終え、ハンブルクへ行きました。1904年、弟のマックス・タウトが同校を卒業しております。ケーニヒスベルクはドイツ人の勤勉さと美的センスにより700年にわたって築かれた素晴らしい町で



写真12 タウトが通学したケーニヒスベルクの建築工芸学校 (Baugewerbeschule)

した。それが第二次世界大戦の敗戦により、ソ連により奪われ70年が経過してしまいました。カーニングラードは周辺国がソ連から独立したものですから、現在はロシアの飛び地のような存在になっております。ここにロシアが軍事拠点を設けるような事があれば西欧諸国にとって恐怖であります。

## ニーデンの教会

**田中**：ケーニヒスベルクに関し、詳しい解説を有難うございました。もう一つの質問、ニーデンの教会について説明してください。

**レーナート**：はい、ブルーノ・タウトは1906年に師匠、テオドル・フィッシャーから独立します。そしてコーリンのヘドビック・ヴォルガストと結婚しベルリンへ戻ります。1908年にベルリンの建築家ハインツ・ラッセンと一緒に働くようになります。そして1909年にベルリンでフランツ・ホフマンと共同の設計事務所を設立します。

ブルーノ・タウトは、1909年からベルリンで最初の集合住宅を建設していたときに、フォアポンメルン州のニーデンの村の教会(写真13)の改築を依頼されました。これも師匠テオドル・フィッシャーの仲介でした、すでに1906年に画家のフランツ・ムッツエンベヒャーとともにウンターリクシングンの教会で最初の教会建築改修は行われていました。

村の教会は、13世紀に建てられた初期ゴシック様式のホール教会です。野原石で造られ、墓地の中に建っています。18世紀に、マンサード屋根と西塔の上層部が改修されていました。



写真13 ニーデンの教会

1710年に作られたバロック様式の説教壇が特徴的で、ここにはキリストとプロテスタントの福音伝道者たち、登り口にはイサクの犠牲と聖なる蛇<sup>註14</sup>のレリーフが描かれ、天使の像が説教壇の支えとなっています。

祭壇の脇には、18世紀前半に作られた背面パネルが塗装された牧師席と礼拝者の席があります。バロック様式の列席者と西側の聖歌隊席は1800年頃に作られたもので、装飾的な塗装が施されています。教会堂の中央には、洗礼用のボウルを持った天使が浮かんでいます。洗礼の際には、滑車を使って下げることができます。18世紀に作られた洗礼用天使のコピーが今も保存されています。真鍮製の洗礼盤は1691年のものです。教会ホールのシャンデリアと14個の真鍮製燭台は、18世紀に設置されたものです。18世紀のオルガンは2階の聖歌隊席にあります。1871年のバルニム・グリューネベルク (Barmim Grüneberg) の作品です(写真14、写真15)。

ニーデンの教会も、ブルーノ・タウトとフランツ・ムッツエンベヒャー (Franz Mutzenbecher) が共同で手がけた教会建築であります。2年間の工事を経て、1911年にカラフルな教会の改修が完了しました。今日でも、ブルーノ・タウトが仕事をした証拠として名前が、ギャラリーの天井に残っています(写真16)。

教会の改修から3年後、フランツ・ムッツエンベヒャーは、タウトの1913年のケルンのヴェルクブンド展に出展したガラスパビリオンで巨大万華鏡を制作します。この作品でブルーノ・タウトは一躍有名になりました。(写真17)

**田中**：詳しい解説を有難うございました。

その後休憩を挟み、第3部のマンフレッド・シュペイデル教授の講演があった。2023年3月にベルリンで出



写真 14 ニーデンの教会、説教壇

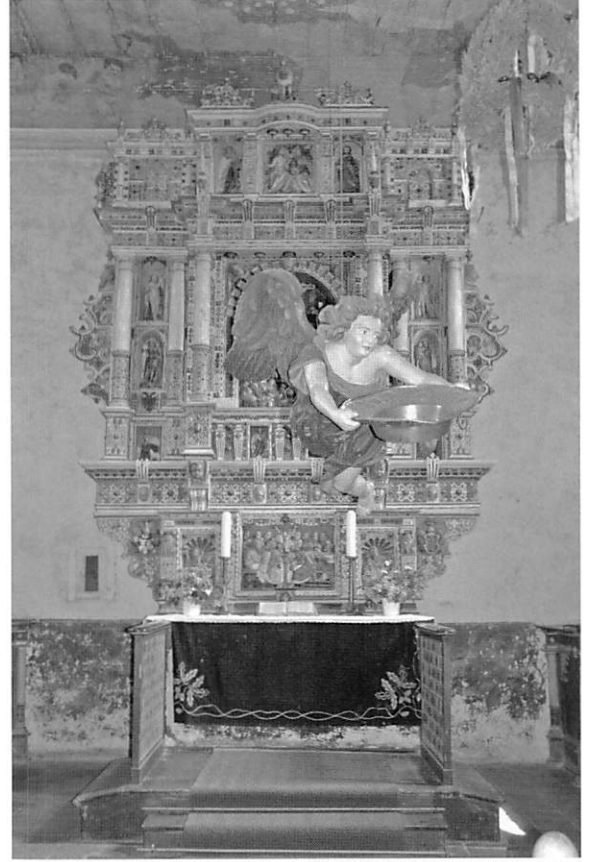


写真 15 ニーデンの教会、洗礼用のボールを持つ天使が滑車で上げ下げされる



写真 16 ニーデンの教会の天井、工事関係者の名前の中にブルーノ・タウトの名前がある。

版された「ブルーノ・タウト：日本の工芸文化と家具」という本の解説で、立ち上がり、気合の入った講演で参加者を魅了した(写真18)。

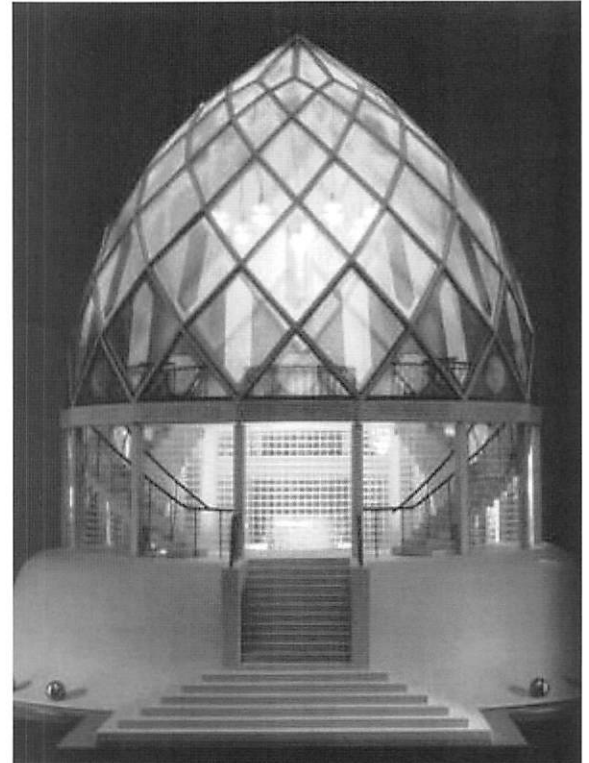


写真 17 ブルーノ・タウトの出世作「ガラスの家」の模型、1913年に行われたヴェルクブントの展覧会に出品



写真 18 シュペイデル教授の講演「ブルーノ・タウト：日本の工芸芸術と家具」については、本誌 2023 年 10 月号に掲載の予定。



写真 19 講演会場の起雲閣音楽ホールは熱海ブルーノ・タウトの会会員の努力により、展示が行われていた。(Dr. Lehnert と筆者)

註

1. 起雲閣：起雲閣(きうんかく)は静岡県熱海市昭和町4-2にある近代建築。熱海市指定有形文化財。1919年(大正8年)に建築。元は実業家根津嘉一郎、農商相・内田信也の別邸であった。後に日本観光株式会社取得し旅館として営業していたが2000年(平成12年)に日本観光が自己破産、以降は熱海市所有の観光施設となっている。  
日本近代建築の特徴を備えており、暖炉やガラスの採光、そしてローマ風呂といった大正時代以降のモダンな建築様式が残っている。
2. ブルーノ・タウト：日本の工芸芸術と家具：Manfred Speidel Bruno Taut Kunstgewerbe und Möbel für Japan, Gebr. Mann Verlag 2023#
3. エリカ・ヴィッティヒ (1893-1976)：ブルーノ・タウト夫人として来日したが、実際には籍は入っていなかった。タウトの良き秘書として活躍。タウトがイスタンブールで1938年に死去の後、少林山達磨寺にタウトのデスマスク、遺品を届けた。その結果、タウトの日記や著作を翻訳することができた。
4. クラリッサ：タウトとエリカの間に生まれた娘。タウトが正妻ヘドヴィックに懇願し、籍を入れた。その結果タウト姓を名乗る。クラリッサはタウトに影響を与えた作家、思想家、詩人であったパウル・シェアバルトの作品「小遊星物語」(1913年)の勇敢なヒロインの名前である。
5. ヘドヴィック・ヴォルガスト(1879-1968)：ベルリンの郊外コリンの出身。ブルーノ・タウトと結婚し、長男ハインリッヒと長女エリザベートを設けた。タウトが来日した際もベルリンに残っていた。
6. ハインリッヒ・タウト(1907-1995)：タウトとヘドヴィックの間に生まれたタウトの長男。父親にはあまり面倒を見てもらえなかった。共産主義思想を持ち、旧東独時代にベルリンのフンボルト大学で共産主義思想の教授を行った。岩波書店の招待を受け、1977年9月に来日した。日本ではタウトの足跡をたどり、父親の感想を否定するようなコメントを残した。
7. オットー・シリー：オットー・ゲオルク・シリー(Otto Georg Schily, 1932年7月20日ボーフム生まれ)は、ドイツの弁護士、政治家(SPD)である。1998年から2005年まで連邦内務大臣を務めた。緑の党の共同創設者であったが、1989年11月にSPDに移籍した。  
ドイツの環境政策を推進した。タウトの孫クリスチーネと結婚したが後に離婚。
8. ブルーノ・タウト(1880-1936)：ドイツの天才的建築家。ベルリンに多くの集合住宅を建設し、その内4つのジードルングが2008年に世界遺産に登録された。ナチス政権を逃れ、1933年に来日した。主に高崎の少林山達磨寺に籠り、著作と工芸指導に励んだ。
9. 田園都市：田園都市(でんえんとし、英：Garden city)には、「豊かな自然環境に恵まれた都市」という一般的な意味と、1898年にイギリスのエベネザー・ハワードが提唱した新しい都市形態という、2つの意味がある。後者のハワードの提案は、その後の都市計画、とくに住宅地計画に対して大きな影響を与えることとなり、

- 第二次世界大戦後のイギリスのニュータウン政策のみならず、日本をはじめとする世界各地における郊外型の都市開発などにも大きな影響を与えた
10. カール・レギエン(1861年12月1日-1920年12月26日)は、ドイツの組合主義者、穏健派の社会民主主義政治家、国際労働組合連盟の初代総裁である。  
氏の名前を冠したジードルングをブルーノ・タウトが設計した。1928~1930年に建設され、2008年に世界文化遺産に登録された。ベルリン市のPrenzlauer Bergにある。
11. チュートン騎士団：ドイツ騎士団(ドイツきしだん、独：Deutscher Orden)とは、ローマ・カトリック教会の公認した騎士修道会の一つである。正式名称はドイツ人の聖母マリア騎士修道会(羅：Ordo domus Sanctae Mariae Theutonicorum Ierosolimitanorum、ドイツ語：Orden der Brüder vom Deutschen Haus der Heiligen Maria in Jerusalem)。英語では「Teutonic Order」と呼ばれ、日本ではその英語由来の訳語としてのチュートン騎士団でも知られる。自発的に報酬を目標に、中世には聖地やバルト海地域で十字軍の騎士修道会として活動した。プロイセンなどを統治し、東方植民の先駆けとなった。
12. フリードリッヒ1世：フリードリッヒが王となる前は、1688年からブランデンブルグ選帝侯とプロイセン公を兼任していた。その当時はフリードリッヒ3世と呼ばれた。その後、1701年にプロイセン王となり、フリードリッヒ1世と改名している。文献によってはケーニヒスベルクで戴冠式を行ったのはフリードリッヒ3世と書いているものもある。両方正しい。
13. 少林山達磨寺：群馬県高崎市鼻高町296にある黄葉宗の禅寺。建築家ブルーノ・タウトが伴侶エリカと共に2年4ヶ月居住し、沢山の著作に励み、また工芸の指導を行った。
14. 聖なる蛇：旧約聖書「創世記」第3章の挿話に「失楽園」がある。蛇に騙されたアダムとイヴが、神の禁を破って「善悪の知識の木」の実である「禁断の果実」を食べ、最終的にエデンの園を追放された。

〈参考文献〉

1. 田中辰明 ヴォルフガング・レーナート博士による講演「知られざるヴァイセンホーフジードルングとブルーノ・アウト」月刊建築仕上技術2022年9月号
2. 田中辰明 W.レーナート博士講演「木質系断熱材と木造建築の発展」月刊建築仕上技術2017年2月号
3. 田中辰明「ドイツのエコ建築家ヴォルフガング・レーナート博士の講演」、月刊建築仕上技術2019年12月号
4. 田中辰明「ドイツのエコ建築家ヴォルフガング・レーナート博士の講演『ブルーノ・タウト、青雲の志と現代』」、月刊建築仕上技術2023年6月号
5. 田中辰明「ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家」中公新書(電子書籍)